

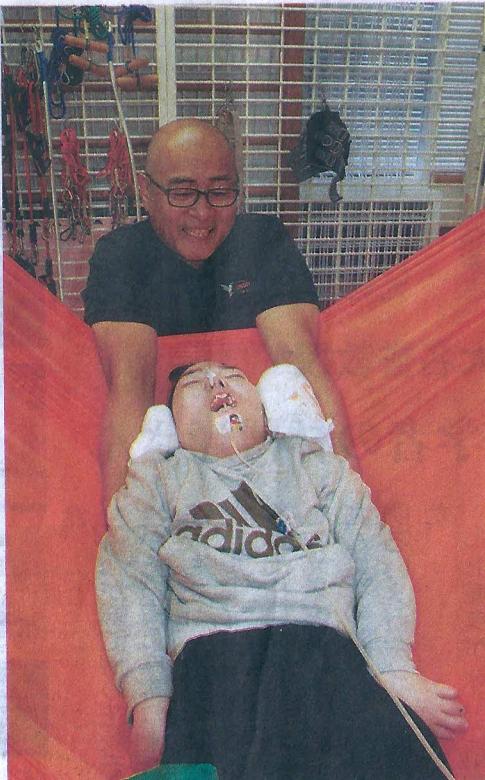
2019.4.29

月

新

中

# 体の仕組み 理解して工夫



空中ヨガの布を活用したりハーピングを行なう高塩さん(左)  
翔太君=草津市のびわこ学園医療福祉センター草津で

二〇〇二年に双子を出産後、大津市の滋賀医科大病院に緊急入院した淀水希さん=当時(三九)。重度の感染症で死の淵をさまよう間、夫の教司さん=当時(四三)=「は、生き残った息子に『翔太』と名付けてくれていた。

病室のベッドにいた希さんは「もう一人の息子が、なぜ死んだのか」と自問自答を繰り返したが、答えは出なかつた。悲しみに暮れながらも、脳性まひがあり新生児集中治療室(NICU)に入った翔太君を、早く抱いてあげたい思いでいっぱいになつた。

翔太君の主治医と面談した日、率直に尋ねた。「お姉ちゃんたちみたいに元気になりますよね」。医師は答えにつまつたが、希さんは元気になると信じた。

## 淀水家 ②リハビリ

退院直後からリハビリにも通い始め、びわこ学園医療福祉センター草津(草津市)で、理学療法士の高塩純一さんは、うつぶせができるよう(六〇)に出会つた。高塩さんは、翔太君の体の動きを見て、時折起きていた発作の原

因を説明してくれた。翔太君は、生まれつき脳内に髄液がたまる水頭症といふ障害もあり、入院中は常に仰けられていた。自宅で突然顔色が悪くなることがあつたが、原因が分からなかつた。

生後一年が過ぎたころ、身に育児に励んだ。翔太君が生後七ヵ月で退院して在宅療養に移つて以降、こまめに体位変換するなど懸命に世話をした。食事は、とろみをつけたミルクを食べさせた。だが、誤嚥性肺炎を繰り返して入院した後は経鼻栄養になり、ケアの仕方も変わつた。

翔太君は酸素を取り入れるために全身に力が入り、肺にもたんが流れ込んで、呼吸がよりしづらい状態になつていた。そこで高塩さんが提案したのは「うつぶせ」。たんが口元へ流れやすくなり、肺に酸素が行き渡るという。高塩さんは、うつぶせができるようになつた。翔太君の体を支えるクッションをラレタンで作つた。

十六歳になつた翔太君は最近、高塩さんが考案した、空中ヨガ用の布を利用したりハーピングも開始。翔太君は体の強さが消え、体調が徐々に落ち着きつつある。

「高塩さんとの出会いをきっかけに、翔太君の体の仕組みや必要な手当てが分かるようになつた」という希さん。当初は、育てることに自信が持てなかつたが、障害について自らも理解を深め、翔太君の可能性を広げようと奔走し始めた。

医療的ケア児と家族の歩み

この命と共に

翔太君は、生まれつき脳内に髄液がたまる水頭症といふ障害もあり、入院中は常に仰けられていた。自宅で突然顔色が悪くなることがあつたが、原因が分からなかつた。

高塩さんは、翔太君が長期に寝かされ、首は横に向けられていた。自宅で仰けられていた。自宅で突然顔色が悪くなることがあつたが、原因が分からなかつた。

高塩さんは、翔太君が長期に寝かされ、首は横に向けられていた。自宅で突然顔色が悪くなることがあつたが、原因が分からなかつた。

因を説明してくれた。